

刊行にあたって

佐藤 大介

近年、大規模な災害が頻発する中で、それに直面した人々がどのように危機に対応したか、また、被災から社会がどのような復旧・復興過程をたどり、新たな社会システムを築いていったのか、さまざまな学問分野で関心が高まる状況にある。

東北大学東北アジア研究センターでは、2007年度より「災害時の歴史資料保全における地域連携」研究プロジェクトを立ち上げている。ここでは主として宮城県および岩手県南の旧仙台藩領において、地震などの災害「前」に、地域に残された古文書などの歴史資料の所在を把握し、行政や地域住民と連携してその長期的な保存体制を構築するための実践と理論の体系化を通じた新たな学問体系の構築に取り組んでいる。この間、2008年6月14日には岩手・宮城内陸地震が発生し、被災地域における資料保全活動を通じて、多くの貴重な歴史資料を保全することが出来た。その一方、活動の中で保全された古文書資料の内容や、実際の保全活動に際して行政および資料の所蔵者、地域の方々との関係を積み重ねる中で、必然的に過去の災害における人々の対応についても問題関心を喚起させられることになった。

このような問題意識を踏まえ、本書では日本の近世社会に生きた人々が作成した災害記録の一つとして、日本近世の幕藩体制下での有力大藩であった仙台藩領における18～19世紀の災害記録を紹介することとした。そのことにより、本センターが所在する宮城県・東北地方の人々が、災害とどのように向き合ってきたかを明らかにするための基礎史料について利用の便を図ることが第一の目的である。

一方、近世の奥羽地域は、数度の飢饉など社会基盤そのものが揺るがされるほどの大災害を経験してきた。その地域に直接関連する史料を紹介することは、一地域の事例にとどまらず、日本列島における災害と社会との関係史を考察する上でも有益だと考えている。

本書では、今後の史料利用の便を図るため、冒頭に記録の伝来と筆者についての解題を付した。さらに、史料の記載内容について日本近世史学の視点から検討した解説二編を収録した。本書全体の内容が、災害と社会との関係について考察するための手がかりを多少なりとも提供できていれば幸いである。ぜひ多くの方々に利用していただきたい。

本書の刊行については、東北大学東北アジア研究センターにおける地域連携をふまえた研究活動を通じて実現することが出来た。プロジェクト研究代表の平川新教授を始め、スタッフ一同に心から感謝申しあげたい。原史料を所蔵する東北大学附属図書館には史料利用の便宜を図

っていただいた。仙台市博物館と仙台市史編さん室の両機関には原史料の解読や図版の掲載について御協力をいただいた。解読や解題・解説の執筆については仙台北下町研究会の皆様から貴重な御助言を頂戴した。史料編の校正には天野真志さんのお手を煩わせた。記して御礼申し上げます。

(付記)

本書は平成 20 ～ 22 年度文部科学省科学研究費・若手研究 B (課題番号 20720165) 「18 ～ 19 世紀における奥羽両国の地域間交流と地域形成」(研究代表者・佐藤大介) による研究成果の一部である。